

25 診断に苦慮した胆嚢結腸瘻の1例

渡辺 智子・安斉 裕・山田 明
阿部 要一

医療生活協同組合木戸病院外科

症例は81歳男性、主訴は腹痛、熱発。多発性脳梗塞にて当院神経内科で経過観察中、平成16年4月29日、腹痛、食思不振を主訴に当科入院。第5病日より腸閉塞の状態となった。第8病日熱発あり。肺炎と診断され内科転科。メロペネム投与にて炎症所見は軽快した。第21病日、腸閉塞の原因検索の注腸にて、横行結腸より胆嚢胆管が造影される所見を認めた。胆嚢結腸瘻と診断し同日緊急手術施行。胆嚢摘出術、横行結腸部分切除術を行った。組織学的には急性胆嚢炎による壁の壊死性変化を認めた。

本症例の腸閉塞の原因は胆嚢炎の大腸穿破に起因した麻痺性イレウスであった可能性が高いが、意思疎通困難、肺炎の合併等により容易に正診に至らなかった。胆嚢結腸瘻は比較的稀な病態であり、合併症を有する高齢者に生じ易い傾向にあるため、確定診断に至るまで苦慮する 경우가多く注意を要する。

26 肝細胞癌大動脈周囲リンパ節転移の1切除例

蛭川 浩史・多田 哲也・天白 典秀

立川総合病院外科

症例は51歳、男性。20年前よりB型肝炎を指摘されていた。平成14年5月肝S7の径3.5cmの肝細胞癌に対し部分切除術を施行。術後診断はT2N0M0 Stage II。組織学的には中～低分化型肝細胞癌だった。平成15年10月腹部CT検査で下大静脈裏面リンパ節の腫大を指摘された。精査で他に悪性病変を認めず、肝細胞癌の大動脈周囲リンパ節転移と診断し、平成16年6月1日手術を施行。手術所見では左右腎静脈流入部裏面に径約5cmのリンパ節を認め、下大静脈壁に強固に癒着していたが鋭的剥離が可能だった。切除標本の組織学的検索では低分化型肝細胞癌の転移だった。現在再発なく外来通院中である。肝細胞癌の孤立性大動脈周囲リンパ節転移は稀な転移様式である

が症例を選べば手術適応はあり、切除により良好な予後が期待できると考えられた。

27 腹腔鏡下胆嚢摘出術における胆嚢管テーピングによるCalot三角部展開の試み

村上 博史・石川 裕之・村上 富吉

総合西荻中央病院外科

【緒言】腹腔鏡下胆嚢摘出術(LC)では胆嚢管をほぼ同定剥離し、胆嚢動脈を処理、Calot三角部(C部)を確認後胆嚢管を処理するのが一般的である。通常は胆嚢管の頭側にC部が観察され、同部の視野展開、操作に難渋することは少なくない。限られたポート数で、C部の展開に胆嚢管のテーピングを試みた。

【方法】胆嚢管と思われる索状物を同定剥離し、索状物にテーピングまたは太めの糸をかけ、右側腹ポートより出し牽引しC部を展開する。

症例は77歳、女性。手術、胆嚢管をほぼ同定剥離、太めの糸をかけ外側に牽引、C部を展開し操作を進める。LC、術中胆道造影施行。術後経過良好。

【結語】LCにおけるC部の視野展開に、胆嚢管のテーピングによる牽引を行った。同法は総胆管、胆嚢動脈の損傷予防に有用と思われた。

28 当科における難治性食道胃静脈瘤に対するシャント手術の治療成績

竹石 利之・佐藤 好信・山本 智

平野謙一郎・大矢 洋・中塚 英樹

小林 隆・渡辺 隆興・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科

【目的】難治性食道胃静脈瘤に対して施行したシャント手術33例(選択的シャント20例、非選択的シャント13例)の成績を報告する。

【対象】シャント手術を施行した33症例(男16人、女16人、平均年齢60±12歳)。原疾患は、ウイルス性肝硬変14例、アルコール性肝硬変10例、原発性胆汁性肝硬変3例、その他5例。内6例に肝癌合併を認めた。